

〈礼拝説教〉 2014年1月26日

足の裏のちりを払って行く

初代の教会—59

使徒言行録 13章 44～52節

マルコによる福音書 6章 6B～13節

武田真治

1、ターニング・ポイント

人は誰しも、あの時が自分の人生の転換点（＝ターニング・ポイント）であったと後から思える瞬間というものがあるのではないのでしょうか。まさに今日の箇所が、伝道者パウロとバルナバにとってのそのような転換点（＝ターニング・ポイント）となったのでした。

即ち「次の安息日になると、ほとんど町中の人々が主の言葉を聞こうとして集まって来た。しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたま、口汚くののしって、パウロの話すことに反対した。そこで、パウロとバルナバは勇敢に語った。『神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。』」です。今迄、彼らは各地のユダヤ人への伝道を第一にして来ました。町についたらまずユダヤ教の会堂に入って、旧約聖書から解き明かしてイエス様こそ真の救い主であることを語って来たのでした。しかし、その重点をこの時から「異邦人の方に」と移して行くのです。そのことを決断した瞬間でした。まさに彼らにとってのターニング・ポイントであったのです。

2、現実との出会いからこそ

パウロとバルナバもユダヤ人でした。その彼らが各々、キリスト者となる時もまさに人生の大きな転換点（＝ターニング・ポイント）でした。特にパウロの回心はとても劇的なものでした。ですから、同じユダヤ人に自分たちと同じような回心や転換を迫ることは当然でしょうし、その方が効果があるに違いないと思うのも無理はないでしょう。彼ら自身がその生きた証拠、模範となっているのですから。

しかし、実際に伝道を始めたところ、そのような彼らの計画や目論見は、それ程う

まく行かなかったのです。むしろ厳しいユダヤ人からの反発や抵抗を受けたのです。こんなはずはないと思ったことでしょう。その一方で、異邦人たちからの反応はとて熱いものでした。何より語った説教に対する反応が段違いでした。

そこで二人は考えたのでしょう。何度も話し合ったかもしれませんが。その結果として「わたしたちは異邦人の方に行く。」という大胆な方針の転換を行ったのです。

私がすごいと思うのは、彼らが当初の計画や目論見に固執していない点であり、出て行ったその場所で起こった反応や状況に即して自分たちの進む道を変えている点です。その柔軟性が素晴らしいのではないのでしょうか？

私たちは前以て頭であれこれと考えて、計画を練り、行動に移します。その結果、うまく行かない、思い通りに進まないということが往々にして起って来ます。その結果、どうしてうまくいかないのかと悩んだり、自分の計画がダメだったと悲嘆にくれてしまうものです。しかし、だからそこには神様の御導きがなかったとか、神様の御心にかなわなかったということなのではないのでしょうか？ 自分の思い通りに運ばなかったから、自分の行くべき道ではなかったと結論付けてしまっても良いのでしょうか？

むしろここでパウロたちが行っていることは、出会った現実や持ちあがって来た課題の方にこそ、神様の御意志、御導きを認めようとしているのです。そちらの方が神様が示して下さった答えだと。

だからこそ、その現実自分たちのこれまでの在り方や方法まで合わせて変えようとしているのです。目の前の現実こそ、神様の答えであるのだと、ここからしか御導きは続いて行かないのだと。この受け止め方こそ今の私たちが学ぶべき点ではないかと思えます。

反対にユダヤ人たちの問題点は、パウロがここで「神の言葉はまずあなたがたに」語られたのに「あなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている」と指摘しているように、これまでの自分たちの考えや在り方に固執し、与えられた神の言葉を拒否し、その良き機会を生かさなかった点でした。古き自分が自分の邪魔をして、せつかくのチャンスを失ってしまったと。

ここでも「自分の在り方」が問われているのではないのでしょうか。パウロとバルナ

バのように、自分たちの目の前に生じている現象を神様からの新しい導きがそこにあるかもしれないと受け取るか、それともユダヤ人たちのように、依然として古き自分に固執するか。誤解を恐れずに言うなら、自分の邪魔をしているのは、結局、自分なのではないでしょうか！

3、足の塵を払い落とし

そのようなパウロの言葉にもかかわらず、尚もユダヤ人の一部は「神をあがめる貴婦人たちや町のおもだった人々を扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、その地方から二人を追い出した」のでした。これは、ユダヤ教のシナゴグに集っていた一部のローマ人の夫人たち（夫がローマから派遣されていた軍人や隊長たちだと考えられます）にキリスト教の悪評を吹き込み、彼女たちを通して、夫やその町を支配していたローマ人の総督などに働き掛けさせ、まんまと公の形で命令を發布させ、パウロとバルナバをこの地域から追放したと考えられています。あくまで自分たちにとっての異質な存在を認めないという頑なな態度を崩すことはなかったのです。

その際、この町を後にする時に二人が行った行為が「彼らに対して足の塵を払い落とし」でした。

この行動は、イエス様が弟子たちを各町に伝道に派遣された時に「あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようもしない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落しなさい」と教えられた言葉から来ています。この意味はもはや彼らのことは自分たちとは関係がないことを「証し」することです。つまり、相手が神様によって滅ぼされようが罰せられようが、もはや関係ない、自分たちに責任はないということを表します。自分たちはやるべきことは果たした、後はもう勝手にどうぞという意味です。ここもそのような意味が込められていると言い得ます。

ただ、この行為にはもう一つの意味があります。それは「新しい聖なる地」に入っていく時に足の塵を払って、足を清めて入っていくことも表しています。

それは、この時のパウロとバルナバにしてみれば、ユダヤ人たちに向けて足の塵を払い、新しく異邦人たちの方へと向かう決意表明とも採れるのではないのでしょうか。

そうであるならば、これから向かう異邦人の地こそ「新しい聖なる地」と彼らが捉えていたとも考えることができます。

このように、足の塵を払う行為は古きものを払い落して新しき地へと転換する時に行うものだと言い得ます。それは、私たちにとっても、まさに新しい地や再出発をする時に行なうべき行為とも言い得るのではないのでしょうか。まさに、ターニング・ポイントにこそ、それまでの古き足の塵を払って新しい一步を踏み出していくべきでしょう。これから新しい地に踏み出して行こうとする時に、自らの足に「古き塵」を付けていてはいけません。まだ古き自分への固執を持っていると新しい一步を踏み出すことが出来ないのです。逆に言えば、その時には、これまでいかに自分が大事にして来たものであってももはや「塵」でしかないということがあるのです。それらを神様が備えて下さった新しい地へと持ち込むことは出来ないのです。

4、人生最後のターニング・ポイント

ある解説者が、私たち一人一人にも、必ず自らの足の塵を払い落して入って行かなければならない時があると言っています。それは「最期の時、死の瞬間」だと。

私たちの最期の時は、天のみ国、神様のもとへと自らの歩みを踏みだして行く時です。約束されたその「聖なる地」には、自分の足の塵を払って入って行くのです。それは、私たちがどんなに願っても、どんなに欲しても、この地上のものを持って行くことは叶わないということです。その時には、この地上でどんなに大切なものでも、どんなに固執しているものでも「塵」に過ぎないものになるのです。それはとても厳しい現実ですが、誰にでも来る転換点（＝ターニング・ポイント）であるのです。いつか、み国へと歩みを踏み出す時が来る事を覚えつつ、その時に備えて生きることこそ私たちの信仰ではないのでしょうか。それが私たちの「証し」となるのです。

その時が来たら、自ら自分の足の塵を払って、堂々と神様に従って行く者へとやらせて頂きたいのです。（説教より抜粋）